

多収性水稻品種 ‘とよめき’、‘たちはるか’ の 多収・高品質栽培法

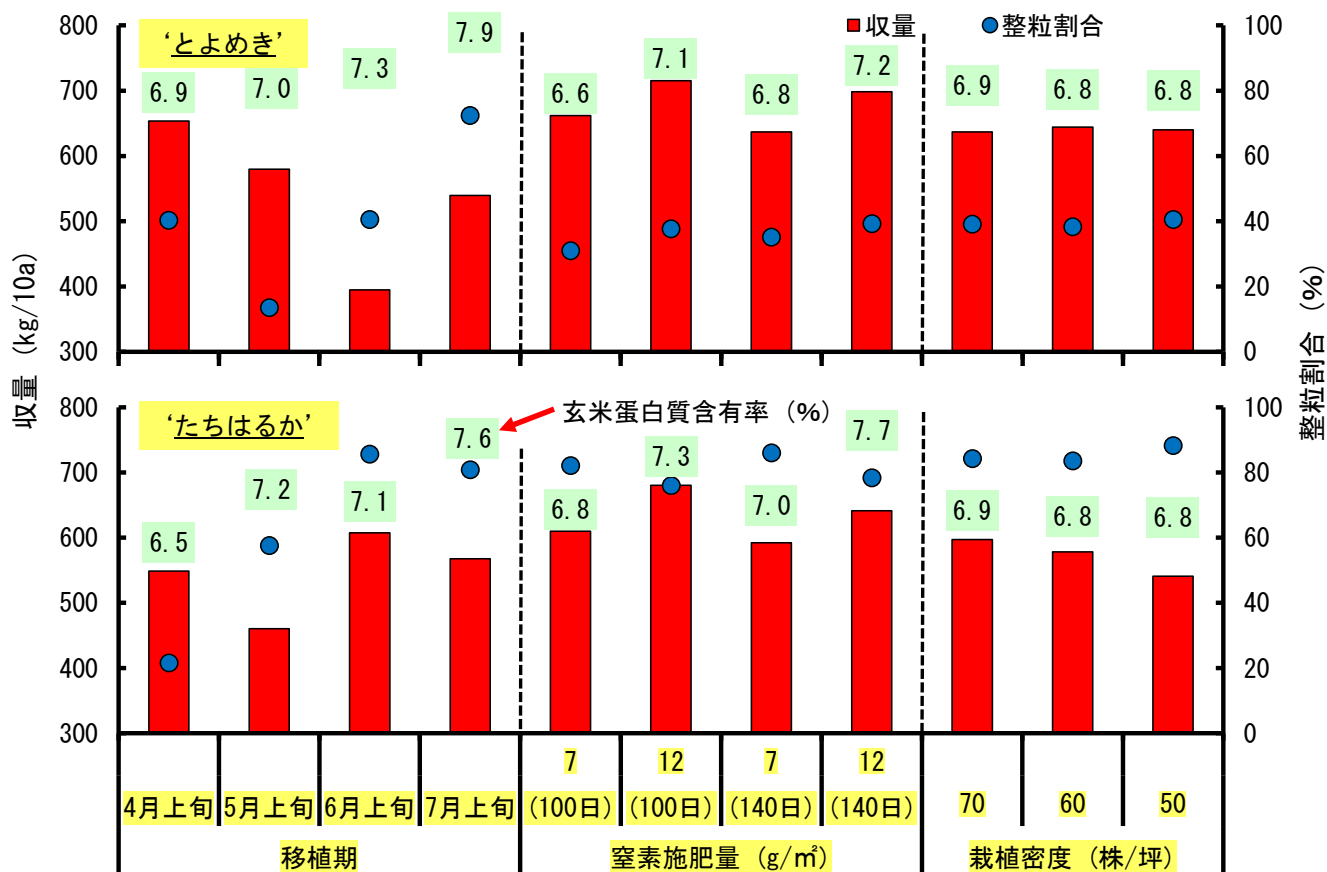


図 ‘とよめき’、‘たちはるか’ の収量、玄米品質

注) 施肥試験の () 内は肥効期間を示す。各試験の処理以外の耕種方法は、移植期は‘とよめき’では4月上旬、‘たちはるか’では6月上旬、施肥条件は肥効期間140日の肥料を窒素施肥量7g/m²で施用、栽植密度は坪70株である。

高知県農業技術センターニュース第106号で、酒造原料米や業務米に活用できる多収性水稻品種として‘とよめき’と‘たちはるか’を紹介しました。今回は、2品種の多収・高品質栽培法の確立に向けて、移植期、施肥、栽植密度を検討しましたので結果を紹介します。

高品質なお米を多く収穫するための移植期は、‘とよめき’では4月上旬、‘たちはるか’では6月上旬が適し、その際にさらに多く収穫するためには、2品種ともに窒素施肥量は7g/m²より12g/m²、肥効期

間は140日の肥料より100日の肥料、‘たちはるか’では栽植密度坪70株が有効であると判断されました(図)。

ただし、酒造適性や食味へ悪影響を及ぼす玄米蛋白質含有率が2品種ともに窒素施肥量7g/m²より12g/m²で高くなったことや‘とよめき’はいもち病に弱いことから、地力を考慮して、過度な施肥にならないように留意する必要があります。

(水田作物担当 赤木浩介

088-863-4916)